



『一步一步進もう』

~Let's Move Forward Step by Step~  
東京六本木ロータリークラブ会長

# TOKYO ROPPONGI ROTARY CLUB

## WEEKLY REPORT

東京六本木ロータリークラブ



『ロータリーは分かちあいの心』

～Rotary Shares～  
国際ロータリークラブ会長

発行日 2007年12月17日

No. 19

平成19年12月3日  
卓話 『ロータリーにできること』  
俳優

(社福) 世田谷ボランティア協会 名誉理事長  
NPO法人 チャイルドライン支援センター 代表理事  
牟田 悌三 様

皆さんこんにちは。牟田悌三でございます。私ロータリーにお世話になって34年たちます。私のいろんな活動のきっかけは、10周年記念事業に子供のことをやってみたいと思ったことです。そのころ子供たちを見ておりますと意欲を感じられないんですね。これは生活が豊かなせいだと、子供に不足というものがあることを伝えなきゃいけないと思い当たったのがハンディキャップという不足。不足を持った方々と中学生、お付き合いをしてもらえば、なんか感じてくれるに違いないと、世田谷の公立中学校に1校、1校お願いして61名の中学生に参加いただきました。

半年の活動で全体会を3回持ちました。最初、野外炊飯で盛り上がり、2回目はやがては自分たちの故郷になる世田谷をもっと知ろうじゃないのと歩いて回りました。最後は、その発見を発表し合う体験発表会。中学生諸君はいろんなことを発見してくれました。その中で野球ばっかりやっている班があったんです。その班には肢体不自由のお子さんがいて立つことができない。そのお子さんが野球やろうよっていうんでみんな困っちゃったんだけど、じゃあやってみようって。バッターボックスで座ったまま打つ、当たらない。そしたらあるお子さんが家に飛んで帰って持ってきたのがテニスのラケット。それで当たるようになった。彼が打って代走が走ったら当人がつまんなそうな顔してる。そうか打つだけじゃつまないよなって言ったら、あるお子さんが這つてもらえばいいじゃないって。そうだよなって一塁までの3分の1ぐらいの所に線を引いて、打ったらそこまで這つて行って、一塁に投げるタイミングでアウト、セーフにするとかいうふうにルールを作りながら野球をした。這つてもらうなんて我々大人は口に出せませんよね。でも純粋な彼らは、こいつはそれでも参加することを喜ぶと考えた。メンバーが最後の体

験発表会で感動しちゃってね。あの中学生が最後に、生きてるって素晴らしいという歌を肩組んでぼろぼろ涙流しながら歌っている。やったーと思ったんですけど、次の瞬間、我々は何をやってきたんだろうって反省しました。しらけの中学生とかいうけど、場を与えればこんなに感動するじゃないか。この活動、10年間続けました。この10年で自分のボランティア感が形作られた気がします。

ロータリーで言うサービス、日本では奉仕ってことで、してあげるってことが強調されるけど、私はいたたくことを考えました。自分ではわからなかつたことがいっぱいあります。一つ申し上げると知的障害のお子さんと一緒に歩いたとき、彼は立ち止まつたり道草を食つたりなんですね。私は、みんなから遅れちゃうって私のペースに巻き込もうとして、そうか、人間立ち止まつても生きていけるんだと気づかせてもらいました。振り返ってみたら私はもう毎日毎日走って生きている。立ち止まつたらみんなに先に行かれちゃうみたいな強迫観念すらあったけど、立ち止まつてみたら景色がよく見えるんです。こんな近くにこんな美しいものがあったとか。ですから私のボランティアは双方向。いただこうという姿勢を持てるようになって、少し幸せになった気がします。

ロータリークラブって毎週、あらゆる職業の方々が集まってる。その気になればもっともっと頑張れるはずです。子供の問題やっておりますと、行き着くところは大人です。大人が変わらなきゃ子供は変われない。そういうロータリアンが先頭に立っていただければと考えます。今こそ皆様の出番であります。

